総　括

アイリーン B. マイカルス・アダチ

時代の流れは言葉で表現される。新しいミレニアムを表象するのは「国際的」、「国際化」・「国際人」などであろう。そこで「国際日本学」という新しい専攻も生まれ、日本文化のあらゆる面を様々な角度から見ることが出来る開放的、前向きの時代が示される。本大学はその研究の先頭に立ち、国際交流を奨励するために毎年国際日本学シンポジウムを主催している。本年は外国から招いた研究者が例年より多く、しかも外国人研究者のみでのパネルを初めて開いた。「外」から日本文学の「内」へと進入するという形で行われたパネルではあるが、パネリストの発表が終わってから、シンポジウムに参加していた多くの日本人「内」から「外」へという形でデイスカッションに意見を加えた。日本文学への関心で結ばれた様々な国の人々ではあったが、デイスカッションが進行するに従って国境というバリアがなくなり、真の国際交流が出来たように思われる。発表、デイスカッションなどがすべて日本語で行われたということで日本語は国際語としての役割も果たし、色々な意味で本大学だけではなく日本学研究全体においてもこのパネルは歴史的なイベントとなった。

奥深い、豊かな日本文学についてのパネルを計画する場合に一番苦労するのがテーマを決めることであるが、このパネルは多くの研究者を惹きつけるひとつの観点である「女性」に焦点をあて、様々な作品、及び女性と関連するテーマ、モチーフなどについて議論することにした。時代は幕末から現代に広がり、劇、詩歌、散文という多様なジャンルを取り上げながら日本文学における女性像を追ってみた。研究課題としてばかりでなく、「女性」に焦点を当てたことにはもっと深い意味もある。それは"Celebrate Women"、つまり女性を祝したいからである。本大学は女子大学であることを始め、日本文学史の中に重要な役割を果たしてきた女性、近年積極的に活躍するようになった女性作家、そして目につくほど増えてきた女性研究者のことを考えて、「女性」そのものに敬意を表してこのパネルをコーデイネートした。

しかし、「女性」という課題が広大では大きすぎるためあるためテーマをしぼる必要があった。そこで、フランス生まれの「ファム・ファタル (femme fatale)」という概念を借りて、日本文学の中にこのような女性が現われるかどうかについて四人のアメリカ人女性研究者と一緒に考えることにした。「ファム・ファタル」とは良い意味も悪い意味も持つ不思議な言葉である。本来は「ファム」は女性で、「ファタル」は「大災害を引き起こす」という意味で使われていたようである。しかし、時間がたつにつれて色々なニュアンスが含まれ、多様な解釈、使い方などが生まれてきた。現在、アメリカの研究者の間では「人を惹き付ける力のある女」、「危険な魅力をもつ女」などとよく分析される。言い換えると、美しすぎて、魅力がありすぎるために回りの人々、特に男性を迷わせるあるいは狂わせる女性であると言われている。ただし、悪意を持たずに自分の力も知らずに行動するために悪女とばかりは見られないだろう。逆に憧れる女性の一人となる場合も少なくない。

このように複雑なイメージを投影する「ファム・ファタル」は西洋文化から生まれた概念ではあるが、文学の普遍性を考えて私たちは日本文学に当てはめてみることにした。なぜならば、日本文学を代表する『源氏物語』を参考にしてもそのような人物が登場するからである。簡単に言うと、六条の御身所が本来の「ファム・ファタル」であれば、現在使われている「危険な魅力を持つ女」は帝との恋で世の中を狂わせた桐壷更衣であろう。そしてまた、光源氏のような女性が存在していたとすれば、現代的な「ファム・ファタル」の型にぴったり当てはまるとも言えるだろう。

しかし、このパネルの目的は光源氏の現代版あるいは女性バージョンの追及というよりも日本文学における「ファム・ファタル」の定義であった。パネリストたちは色々な作品を考察しながら一つの概念を通して西洋と日本文学の間に架橋しようとした。もちろん小さな橋ではあるが、こうした橋で国際交流のインフラストラクチャが成り立っているとも言える。

以下の論文はその架橋へのステップになるが、日本女性像にとどまらず、「文学と女性」という幅広い問いを含む

ものである。各々の意見が述べられるものの、共通しているのは日本文学への関心と愛着、そして西洋と日本文学の普遍性の追究である。ファム・ファタル的なるものを探りながら国際交流の本質についても考えさせられる興味深い諸論文である。読者にとって新鮮なアイデアとの出会い、新しい世界への誘い、そして国際交流のネット・ワークを広げる招待状ともなるので、今後の日本文学研究に与える影響が期待される。

なお、パネリストのうち、ダラム・ヴァレリ氏の発表は、『日本文学』（2001年10月号）に掲載された「『悪婆』試論－台帳における用法を中心に－」に基づいたものである。ダラム先生はパネルの先頭に立って幕末から明治初期における「ファム・ファタル」について色々と指摘した。興味深い発表であったので、詳細を詳しく知りたい方は、元の論文をご参照下さい。